たかさご史話⑧

～山陽鉄道の開通～

旧国鉄（現・ＪＲ）の山陽本線は、当初は山陽鉄道会社が経営する私鉄線でした。

明治三十九年（一九〇六）に公布された鉄道国有法により、山陽鉄道会社が国に買収されて国鉄線となったのです。

そもそも山陽鉄道会社は、神戸と姫路の間を結ぶことを目的として、明治十九年（一八八六）十二月に会社の設立認可申請が出されました。発起人には、神戸や大阪・東京などの実業家のほか、印南郡今市村（現・高砂市）の伊藤長次郎ら沿線の地主も名を連ねています。

しかし、この鉄道起業計画を主導したのは、当時兵庫県知事であった内海忠勝です。

現在の兵庫県は、明治九年（一八七六）に、摂津、播磨、丹波、但馬、淡路の五か国の地域を統合して成立した大県ですが、それだけに知事が統治するのは困難だったようです。とりわけ、高砂を含む旧播磨地域は、一時飾磨県と呼ばれ、姫路に県庁を置く独立した県でした。これが吸収合併されたうえ、県庁は旧摂津国の神戸に置かれたわけですから、播磨の人々の不満は大きかったようです。

こうした状況を見て、内海は、県内の産業を活性化すると同時に、県としての一体感を生み出すための装置として、鉄道敷設を構想したのです。

結局、山陽鉄道会社は、明治二十一年（一八八八）一月になって、下関まで工事を延長することを条件に、設立認可がおりました。会社では、ただちに神戸から西進する形で工事を始め、同年十一月一日には兵庫・明石間を、さらに十二月二十三日には姫路まで開通させました。当初、明石・姫路間には、大久保・加古川・阿弥陀の三駅が設けられましたが、このうちの阿弥陀駅が現在の曽根駅です。その頃の時刻表によれば、列車は一日九往復で、阿弥陀から神戸までは、一時間四十分程度かかっていたようです。

（高砂市史編さん専門委員　松下孝昭）